

精神病棟・2つの経験

6A08075 新井 聖子

ゆきさん、昨夜は大変貴重なお話をありがとうございました。

発信力クイズその1は、《言葉を変えることで本物が見えてくること》

発信力クイズその2は、《世の中の本当のことを知ること、多くの人に知らせること》を学ばせていただきました。更に、それを発信させていく力を養うことが最終的には自身の幸せに繋がることも感じました。

以下、ゆきさんの講義で感じたことを綴ってみました。

発信力クイズその1

特養待機者・終末期医療・徘徊・寝たきり老人という言葉には、違和感があり使うことを避けていた言葉でした。が、「ワクチン」と「負担」に関しては今回の講義で気づかされた言葉です。ワクチンは、自身の体を守ってくれるものであり、無くてはならないものという意識が強かったように思います。『しなければいけない意識』が勝っていました。が、一部であってもその副作用を背負ってしまった過酷さを考えると厚労省の「一人一人が接種することで社会全体を守る」という責任感が、このような事態を招いていることを一人でも多くの人を知る必要があることを痛感しました。

さらに「負担」も、意味を調べると「義務や責任など」「力量を超えて重すぎる仕事や責任」と記されています。ゆきさんがおっしゃるように『困っている人に出し合ったお金を使いましょう』という意味合いとは異なります。『負担率を上げる』という報道がなされれば、ただでさえ力量を超えた責任をもっとアップしなければならなくなります。アップアップすれば共倒れも辞さない状況になり、そこまでしなくてもという声が上がって当然かもしれません。言葉の魔術なのかもしれませんが、『連帯感を高めましょう』となれば反対する人も少ないはずですね。

私は『障害者』という漢字使いにずっと疑問を感じています。20年以上も前ですが、障がいのあるご本人から『障害者』という言葉を使って欲しくないと言われたことがありそれから表記上は『障がい者』と記載するようにしています。『障害者』と書かれる方も多いようです。ただ、書類にそのように記載した時に上司から公の文書には『障害者』記載されているので、書類に記載するときは『障がい者』や『障害者』と記載しないように言われました。英語で言うと差しさわりのない言葉ですが、漢字の意味を考えるとできれば別の文字や言葉に変えられたらと思う一人です。

日本語は、漢字自体に意味があるので難しいです。言葉を変えることが当事者として受け止められることに繋がり、それを発信していくことで自身の事として考えてもらえるのだということを考えさせられた時間でした。

発信力クイズその2

左側のグラフが、私自身にも起こった陣痛促進剤の問題とは気が付きませんでした。昭和60年、長男を出産するときに、私も担当ドクターから『陣痛促進剤を』と言われました。2~3分おきの陣痛が24時間以上も続いていたからです。当時、養護学校（現在の支援学校）で仕事をしていたのです。

が力が余っていたのと、妊娠を軽視していたことで毎晩 11 時、12 時まで仕事をしていたことから切迫流産になり、4 か月間、点滴につながれベッド上だけで生活する羽目になっていました。臨月になりやっと点滴が外されてすぐのことでした。たまたま、入院間際に NHK の番組で陣痛促進剤を打たれた妊婦が不幸なことに陥ったドキュメンタリーを見たことが鮮明に残っていました。頭の中で「陣痛罪は悪」と、1 回だけ見たテレビ番組でインプットされたようです。『何とか痛みを頑張るから促進剤は打たないで』と哀願しました。数分おきの陣痛が 48 時間を超えたとき、助産婦さんが気づいてくれたのです。胎児が臍帯を巻いているというのです。

バタバタと帝王切開の準備が緊急に行われていました。手術室に入るときにお仲人をして下さった校長夫妻まで来てくださり何も知らない私は笑顔で手を振り手術室に入りました。後で聞いたら胎児は首に二重に臍帯を巻いていてもう難しいだろうと言われたそうです。が、運よく助かりました。あの時に、陣痛促進剤を投与していたら長男の命は消えていたと思います。48 時間の陣痛後の筋肉痛は寝返りも出来ないほどの痛みでしたがその時に出産は私には代えがたいものでした。

精神病棟・2つの経験

そして、右側のグラフです。これも、2つのエピソードがあります。介護保険が始まる3年前から私は、『障がい問わず年齢問わず集える場所づくり』の活動をしていました。『さいしょはグー!』という団体です。介護保険が始まったと同時に、仙台市から介護保険事業所として認可を受けました。

まだボランティアで活動していた時から来てくださったのが I さんという当時 60 代の女性です。結婚をされる娘さんが、精神病棟から母の I さんを退院させた翌日に私の所に相談に見えました。10 数年も入院していたので、歩くのがままならない状態でしたし、死んだような目をしていても印象的でした。昼夜逆転もしていました。一緒に心療内科も何度も受診しました。もちろん娘さんからの依頼があつての通院の付き添いです。数年かかりましたが、抗うつ剤が 1 種類に減りました。I さん自身、薬に依存していた部分も大きかったからです。

I さんが一番生き生きしてくれたのは、畑仕事です。『畑の先生』と崇めて、いろんな相談をしました。車で数分のところに畑を借りました。猫の額ほどの畑ですが、足の悪い方も、車いすの方も手を伸ばして作業ができる地面から 80 センチほどの高さがある畑です。車いすで移動することを当たり前にしていた方でしたが、身体的には問題ない方でしたので、畑仕事の時は車いすを使わないようにすることも成功しました。

数年後には車いすはもっと大変な方が使うということを理解して下さり、あちこち出掛けたので歩くことが常になりました。信頼関係が取れるようになってから、I さんから、精神病棟に入院中の話を何度か伺ったことがあります。いつも吐き捨てるように話していました。娘さんの大きな決断で、そこから抜けることができた I さんを、今回の講義で思い出しました。

精神病棟から抜け切れた I さんとは反対に、T さんというパーキンソンで見えた男性は、奥さまが白内障の手術を受けるために介護ができないという理由で短期間の入院をされたのですが、衰弱し、あっという間に亡くなりました。後日、奥さまから伺ったお話では、薬による拘束でダラダラよだれを垂らすようになり、言葉が無くなってしまって間もなくの事でした。「さいしょはグー!」に見えたとき、奥さまの姿が見えなくなると不安になり大暴れをされる方でした。『ドン付き』とおっしゃっていましたがヨイトマケノ歌にあるような力仕事をされていた方でしたので破壊力は素晴らしく、

しばらくは奥さまと一緒にいていただき徐々に離れていく時間を作りながらデイサービスに来ていただいていた。お家でも時々大暴れをするようで、奥さまも困り果てていたのですが、まさかそのような形で亡くなるとは思っていませんでした。

講義の日の新聞報道は、まさに T さんのことを思い出します。ゆきさんのパートナーが、かつて精神病棟に潜り込んでその実態をレポートしたという話を聞いたことがあります。(言葉のニュアンスが違っていたらごめんなさい) 自身の目で確かめることは、想像する以上に大変な労力だと思いますが、それをやらなければ確かな真実も見えてこないのでしょうか。ゆきさんの姿勢にいつも感服しています。

25年前の経験

最後に、私が 25 年前に書いた作文を記載します。とある所で最優秀賞をいただきました。私の活動の原点になっているのでゆきさんに読んでいただきたくお願いいたします。

わたしの提案

一緒に生きる街づくりをー

新井 聖子 (36 歳)

大学を卒業して、初めての就職先は特別養護老人ホームでした。もう 14 年前の話です。

神奈川県平塚市にあるその特別養護老人ホームには、120 人程のほとんど寝たきりのお年寄りが生活していました。

経験豊富な寮母さんにまじって、食事やおやつのお世話をしたり、部屋の掃除をしたり、お風呂に入れてあげたり、更には、昼夜問わず何回も行われるおむつ交換。まるで流れ作業のように時間に追われながらバタバタと働いていました。

でも、その時は“養老院”という暗いイメージにはない快適なこのホームで生活できるお年寄りは何て幸せなのだろう、と思ったものです。年にほんの数回ですが、お家の方が迎えにこられて帰宅される方がいます。毎日、毎日、その日が来るのを楽しみに私たちに話してくださいます。でも、楽しみにしていた帰宅日が来て家族に付き添われてうれしそうに帰っていった人がホームに戻って最初に言うのが『やっぱり、ここがいい…』という言葉でした。家族と長く離れて暮らしているお年寄りが又、元の住処に戻ってもすでに自分の居場所はなかったようです。

そんな中で、何か楽しみを、ということで私が中心になり余暇活動をするようになりました。好きでやっていた生花や和紙のちぎり絵サークルです。指先のリハビリも兼ねたものだったのですが、その時間がくるのを楽しみに待っていて下さったり、ベッドの上でちぎり絵を自ら制作して下さる方も増えました。市内の文化祭にも出品させていただき、とても励みになりました。

今となっては、辛いこともいっぱいありましたが、とてもよい勉強になり、思い出の多い日を過ごさせていただきました。

が、私なりにいろいろな疑問を持ったことも事実です。たとえば、おむつやお風呂の介護をしてもらうお年寄りの気持ち。痴呆になった人がオリのようなベッドに入れられること。食事も介助して食べさせてもらうこと。動揺を与えないという配慮から亡くなった人はみんなに知らせずひっそりと職員だけでお通夜をすること……。

オムツをするよりしないほうがどんなに気持ちがいいでしょう。自分でゆっくりとお風呂にはいれたら、自分のペースでゆっくりとおいしい食事ができたら……。危ないから、ケガをするから、動揺させるから、という理由で歩くことを規制し、必要以上に細かく刻んだ食事をして、本当は、仲間の死を周りで気が付いて、それぞれに追悼しています。

今になってやっと、私たちがしたことは”介護“であって、お年寄りが”生きる場“であるということをおぼえていたことに気づきました。

介護だけでは元気になれない。それは、私自身がその後、4か月程入院してしまった経験からも思いました。生活のメリハリや生きがい、自分がいま必要とされているか否か、などによって心の持ち方はかなり違います。家庭であっても、施設であっても、それは同じことが言えると思います。

年をとったからこそ、きれいにしておしゃれをして過ごしましょう。コンサートやセミナー、自分の趣味のレッスンを受講するのもいいじゃないでしょうか。レストランに行っておいしい食事をいただいたり、お友だちとパーティをしたり、時には子どもたちと遊んだり……。前向きに考え、生きていくことを自分自身も、又、周りの人々も応援していけるような環境づくりが必要だと思います。極端な話、オムツをしていたって、どんどん地域と関わり、楽しいことをやろうという気持ちが大切だと思うのです。

老人ホームであっても、家庭であっても、地域社会であっても『介護する人、される人』という境をなくすこと。”介護する場“ではなくて”生きる場“なのだからという視点に立ち、みんなが当事者になりうるのだから、共に生きる街づくりをしていこうよ、ということをおぼえて、私は提言したいと思えます。

という作文です。認知症という言葉がなかった時代でしたので痴呆という言葉を使っていたり、時代を感じる部分もあります。今、読むと恥ずかしい限りですが、この作文を書いた数年後に『さいしよはグー！』を立ち上げました。

そこでは『介護する人、される人』を極力排除しました。なので、ご近所の方が遊びに見えたと、90代のKさんが玄関にお迎えにいつてくれたり、帰られるときは見送ってくださったりというのは極々当たり前でした。

ボランティア時代には一緒に空間に居ることができた障がい児も何とかして一緒に過ごせるようにと、養護学校の高等部の生徒さんで介護に関心がある方に実習に来てもらい、ヘルパー3級を取ってもらい、スタッフとして採用するといったことも行いました。浅野知事さんに、縦割り行政を超えられるようにもお願いしました。

要介護2や3の方が、そのスタッフにお茶の入れ方を教えたり、拭き掃除を教えたり、おはじきをして見せたり……。それぞれに役割が生まれました。書いているだけで懐かしさがこみ上げてきます。

文章が長くなってしまい、本当に申し訳ありません。えにしの会の前だというのに、たくさんの方々のレポートを見られるゆきさんには本当に申し訳なく思っています。

日にちを跨いで記載しているのが今日9日になってしまいました。来週の講義もまた、えにしの会も楽しみにしています。どうぞ、よろしくおぼえたいと思います。